

=市史編さん便り= 【18号】 令和4年7月5日(火) 発行.

*****土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

◎今後の市史普及啓発活動(各種講座)の予定

7月9日(土) 「土佐ジョン万会総会」講話 場所：高知市 中浜万次郎関係
テーマ「生死の大海を越えて咲いた万次郎」〈会員対象〉

8月3日(水) 「土佐清水市教研社会科部会」講話&巡見案内 場所：足摺岬小
テーマ「足摺岬小学校区の歴史文化財」〈教員対象〉

8月27日(土) 「市民図書館歴史講座」講話 場所：土佐清水市立市民図書館
テーマ「『中浜東一郎日誌』から見た万次郎」〈市民対象〉

9月4日(日) 「土佐史談会郷土歴史散歩」講話
場所：松尾～足摺岬地区、足摺岬海上クルーズ
テーマ「海から読もう足摺・宇和の歴史」【歴史探訪】〈会員対象〉

9月5日(月) 「令和4年度四国地方更生保護女性会員研究協議会」講話
場所：三翠園(高知市)
テーマ「万次郎と母のつながり」〈四国地方更生保護女性会員対象〉

※この夏も各種講座がたくさんあります。この機会を活用し、『土佐清水市史』をし
っかり啓発していきます。また、ご報告させていただきます。

郷土学習資料(2) 一鳥島に漂着した人々

天保12年(1841)1月5日に宇佐浦を万次郎等5人は、足摺岬沖までカツオ漁に出帆した。その日は与津(興津)西掛に停泊し、佐賀沖で操業。翌6日は白浜で停泊。翌朝(7日)足摺岬沖に向かって出帆した。

足摺岬沖で操業している途中、時化に遭い黒潮に乗り、室戸沖・紀州沖から伊豆七島と小笠原諸島の間、北緯30度付近に位置する絶海の孤島「鳥島」に漂着することとなった。

実は、この鳥島に漂着したのは、万次郎らが乗ったカツオ船ばかりではなかった。1681年(延宝8年)～1866年(慶応2年)までの185年間に15例の漂着記録が残っている。恐らく記録に残っていない多くの事例もあったと思われる。ちなみにこれら15例の乗員は、自力で脱出したり、捕鯨船に救助されたりしている。実際には、もっと多くの遭難者がおり、この島で亡くなっている可能性が高い。

中浜博著『私のジョン万次郎—子孫が明かす漂流150年目の真実—』(小学館、289

鳥島漂着船表

	新所在地	帰国者	船種	漂流開始日	漂流	在島	備考	脱出法
①	土佐室津	弥之右衛門5名	荷船	延宝8年12月24日 1681年2月12日	11日	5月1日	②より僅かに先着	①②自力脱出
②	土佐矢井賀浦	清太郎2名	荷船	延宝8年12月23日 1681年2月11日	12日	5月1日	①と同日漂着	
③	土佐田野浦	務平6名	荷船	貞享1年10月10日 1684年11月29日	12日	5月15日		自力脱出
④	日向志布志	少左衛門5名	荷船	元禄9年11月5日 1696年11月29日	51日	2月10日	アホドリを食べず	自力脱出
⑤	遠州荒井	甚八3名	荷船	享保4年11月30日 1720年1月9日	54日	19年3月	火山の火を使う	⑥が⑤を救助自力脱出
⑥	江戸堀江宮本善八船	富蔵17名	荷船	元文3年12月1日 1739年1月10日	57日	28日	漂流途中無人島に寄る	自力脱出
⑦	泉州箱作村	藤八2名	荷船	宝暦3年1月 1753年2月	不明	約6年	火打ち石見つける	⑧が⑦を救助自力脱出
⑧	泉州波有手	佐市郎5名	荷船	宝暦9年1月 1759年1,2月	不明	数日	⑦⑧の20人を救助	⑨を救助自力脱出
⑨	土佐藩船大宝丸	下元伝七8名	荷船	宝暦9年1月13日 1759年2月10日	8日	0日	鳥島に上陸せず	
⑩	土佐赤岡浦義七船	長平1名	荷船	天明5年1月30日 1785年3月10日	13日	12年3月		⑩⑪⑫と自力脱出
⑪	大阪堀江	儀三郎9名	荷船	天明7年12月8日 1788年1月15日	52年	9年3月	発火道具あり	
⑫	日向志布志住吉丸	栄左右衛門4名	荷船	寛政1年11月28日 1790年1月13日	60日	7年3月	大工道具あり	
⑬	土佐宇佐浦	万次郎3名	漁船	天保12年1月7日 1790年1月13日	5.5日	4月23日	外国で生活10年後帰国	捕鯨船が救助
⑭	阿波撫養幸宝丸	徳之丞11名	荷船	弘化1年12月26日 1845年2月2日	46日	25日		捕鯨船が救助
⑮	紀伊国牟婁郡丹敷村	庄助7名	荷船	慶応2年11月11日 1866年12月17日	約6月	約9月	帰国時はすでに開国	捕鯨船が救助

(平成2年12月筆者作成)

中浜博『私のジョン万次郎 子孫が明かす漂流150年目の真実』小学館より引用

頁)には、この15例を一覧表でまとめている。

ここで注目すべき点は、島に漂着した船の内、小型船は万次郎らのカツオ船1隻だけであり、それ以外の14例は、すべて廻船であり、米や産物を積み下ろす五百石船以上の大型の荷船であった。

15例中、12例が自力脱出し、3例は捕鯨船に救助されている。近世末、小笠原諸島周辺海域では米国の捕鯨船が捕鯨を大規模に展開していた。

万次郎ら5人は、幸運にもホイットフィールド船長が指揮するジョンハウランド号に救助された。若くして命の危機を乗り越えた少年万次郎の人生観に、この体験はどのような影響を与えたのだろうか。興味深い。

